

その一
研究の
原点は
自然観察

生物のありのままの姿は美しい。 撮影は二期一会です。

自然や昆虫のありのままの姿を通して、生物の多様性や自然との共生を伝えたい。そんな思いで今日も写真を撮り続ける。

理科の教材作りをきっかけに
日々、生物や自然を撮影。

新しい発見や
二期一会の出会いに感動。



岐阜大学教育学部
理科教育講座(地学)教授

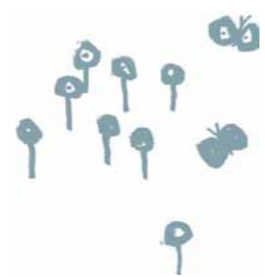
川上 紳一

昨今の小・中学校教育ではICT(情報通信技術)の活用が進み、教材用データのニーズも高まってきています。「それなら小・中学校の理科教育に使える教材を作ろう」と思い、13年ほど前から昆虫などの生態や自然を撮影し、デジタルコンテンツを作り始めました。今までに昆虫は約3000種、植物も約2000種を撮影しています。ほぼ毎日50〜100枚撮影し、名前を調べてホームページにアップします。専門書や図鑑の一枚の写真だけでは、種特有の形態や生態を十分に表現しきれないこともあるので、多角的に写真を撮り、さまざまな生態を表現したいと考えています。

撮影フィールドは大学構内から近郊が中心で、時には国内外に足を運ぶこともあります。特に昆虫や植物は生息する場所が限られるものもあるため、「今日はこれを撮りに行く」と決めたらまず図鑑である程度調べてから動く。そこからは「この林道ならあの蝶がいる」といった具合に絞り込み、自分の経験知と勘だけを頼りに探します。以前、ムモンアカシジミという蝶を撮影するために長野県内の林道で朝からずっと待っていたことがありました。わずか5分のタイムイングでしたが首尾よく撮影。ありのままの姿を撮るのは大変ですが、撮れた時の喜びはひとしおです。



1【岐阜大学の四季・雪の朝】夜明け前から降り出した雪でキャンパスは白銀の世界へと変わっていた。教育学部へ向かう歩道わきの木の枝をふと見ると、そこにうずくまったモズの姿があった。
2【レンゲ畑の午後】教育学部北の自然観察園のレンゲの花が満開となった。ベニシジミやツバメシジミに混じってやや大きいシジミチョウがやってきていた。近づいてみると白色斑と褐色斑が鮮やかな春型のトラフシジミだった。
3【岐阜大学の四季・秋の日】秋になると急に数が増えるキタキチョウ。幼虫は萩などのマメ科の植物で育つ。秋の日を浴びて舞っていた2匹のキタキチョウが、相次いで同色の花に止まり、そして並んだ。
4【オオヨシキリのさえずり】ゴールデンウィークになると、どこからかオオヨシキリがやってきて、大学周辺の河川の土手を占拠する。自分の存在をアピールするように、絶えず大きな声でさえずっている。気づかれないようにそっと近づく。
5【立待月】満月を過ぎると月の出が日増しに遅くなる。夜が更けて月が高く昇るのを待って、教育学部屋上の天体望遠鏡を月に向けた。欠け際に大きく凹んだ縁どりを示す危難の海に目を奪われた。
6【岐阜大学の四季・待ちこがれていた春】教育学部自然観察園でも菜の花が咲き出すと、めっきり春めいてくる。待ちこがれていたようにミツバチが活動を始めた。
(原稿:川上紳一教授)



時にはまだ撮影していなかった希種のトンボや植物を見つけるといった二期一会の出会いもあります。特に地衣類(菌類と藻類の共生生物)は新種を発見する場合もあり、自然界にはまだまだ未知数があると実感します。

キャンパス内でも理科教育用自然観察園が整備されて昆虫の成長を継続的に記録できるようにになり、蝶と食草との関わりもはつきりとしてきました。現在、岐阜大には30〜40種類の蝶が飛来。稀に珍しい蝶が来ることもあり、ここも毎日が離せない場所です。

生物や自然環境との関わりを
写真を通して学んでほしい。

自然の中で生きる生物のありのままの姿を撮影した写真はどれも美しく、例えば蛾が苦手な人でも、写真を見て感動することもある。この自然界には実に多種多様な生物が存在し、これらすべての生物は地球上においてみな平等に生きています。写真を通して、もっと多くの子ども達や大人に生物や自然環境との関わりについて、関心を持って学んでほしい。そのために、これからもより多くの種類の生物や自然をカメラに収めていきたいと考えています。